巻頭特集

コロナ禍でも前向きに学校生活の可能性を広げる

地元に愛される県立志摩高校の今

新型コロナウイルス感染症により、学校生活は大きく変化した。志摩高等学校では、対策の一つとしてオンライン学習の設備を整えた。制約の多いコロナ禍でも、新しい様式を取り入れた学校生活を定着させるべく、環境改善に取り組んでいる。

1 高校生活入門講座全体会　2 パソコンとミキサー　3 文化祭　4 パールズコレクション打合せ

オンライン授業の設備を整え印象に残るコンテンツを

志摩高校3階の教室前に掛かるプレートに「スタジオ」の文字。この教室は、授業を収録した動画をオンライン学習のために編集したり、配信したりする目的で使用されている。モニターやミキサー、照明などの設備が整い、オンライン発表会などにも利用されていて、これほど充実した施設は、県内公立高校ではまだ稀である。

新型コロナウイルスの感染拡大を受け、オンライン授業が取り入れられたが、画質が悪く、黒板の文字が見えづらい、音声が聞き取りにくいなどの課題があった。当時はウエブカメラが品薄だったこともあり、パソコン内蔵のカメラで対応していたが、文部科学省によるコロナ対策の事業を活用し、よりよいコンテンツを提供するために機材をそろえた。教頭の山川覚也さんは「手持ちの機材では限界がありました。授業や講演会など定点収録の動画ではスピーカーの音を聞くだけでは、単調になりがちで、印象に残りにくいものです。背景をバックボードにしたり、プレゼン画面を合成したりする工夫で、印象はがらりと変わります。また、大型ディスプレイを用いて、視聴している生徒の様子が確認しやすくなっています。講演者には生徒の反応が見られ、話していて張り合いがでると好評です」と話す。パソコン関連の機械に強い先生方と一緒に、工夫した内容で配信しようと、人気のユーチューバーがどんな設備を使っているかなども調査した。「いまや番組作りはスマホーつでもできますが、魅力あるものはやはり一工夫も二工夫もされています。学校からの配信も、より工夫することが効果的だと考えます」

オンラインと対面の両立で学習の可能性を広げる

令和2年度から、始業式や終業式、講演会、また文化祭の発表会にオンラインを取り入れた。生徒会役員選挙ではオンライン投票も利用し、中学生に志摩高校をPRする「高校生活入門講座」にも活用した。また、学校外の行事などでも活用。国際教育の研究会で発表者が志摩高から県内各学校へ配信したほか、図書館協議会が主催するビブリオバトルもオンラインで開催した。

日常が戻りつつある昨今だが、一人一人がタブレットを持つ今後の学校では、オンライン学習は学校教育を支える基盤的なツールとなる。生徒も教員も、これからの新しい生活様式に慣れないといけない。「就職面接をオンラインで実施する企業も出てきています。パソコンの内臓カメラではどうしても下向きに喋ってしまい、表情も暗くなりがちですが、別カメラを用意し、ライトを当てることで、表情をよりよく見せることができます」と山川教頭。

また、これからはオンラインを活用した学校間の交流も増えていくと考えられる。何かやりたいと思った時に、できないよりできた方がいい。その可能性を広げ、身につけた技術を駆使し、今後に生かしていくことが求められるだろう。

三重県立志摩高等学校 教頭
山川覚也さん

地域の課題や魅力に気づく総合的探究的の時間

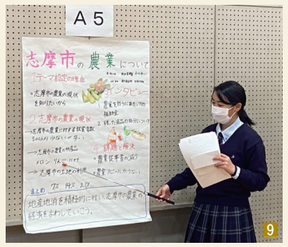
現場に出て、対面だからこそ得られるよさはもちろんある。志摩高校が5年前から取り組む「志摩学」では、生徒は志摩市について学び、生の声を直接聞くために地域へと出掛けている。

授業は週に一度のペース。今年度、1学年は「志摩市の現状と課題を知る」、2学年は「志摩市の産業について知り、地域での働き方を考える」、3学年は「志摩市におけるSDGsの取り組みについて学び、持続可能な志摩市のあり方を考える」というテーマを中心とした地域学習を行っている。「生徒の約9割が、志摩市内の中学校出身です。志摩を知らずに卒業させてはいけないと、地域学の授業が始まりました。こういった地域連携型のキャリア教育は、学校の中だけでできる勉強ではありません。いろいろな人に来てもらったり、いろいろなところへ出かけたりする中で、もっと地元を好きになってくれたらという思いを持って取り組んでいます」と山川教頭。高校生活で、地域への思いを深めて欲しいと取り組む。

1学期には、志摩市の職員や志摩市内で活躍する人を招いて講演会を実施。2学期になるとインタビューやフィールドワークを行い、現地で現状や課題を学び、志摩市の将来を地域の人々と一緒に考える機会となっている。今年9月には職場見学を兼ねて、第一次産業や観光業、福祉関係などおよそ市内40軒を訪問した。生徒からは「今回の活動で見たこと、聞いたこと、触れたことに対してどう感じるか、どう次につなげるか、さらに学びを深めていきたい」との声もあり、地域のことを主体的に考え行動する意欲や、地域とともに課題解決に取り組む姿勢が育っていると感じられる。

この職場見学が、そのまま就職に結びついた生徒もいるようだ。地方は都会に比べれば職種は少ない。産業の担い手不足の問題や、昔ながらの方法だけでは生き残りが難しい業種もある。しかし、今はネット通販で利益を求めたり、家業に従事しながらカフェ経営など別の形態も展開したりと、工夫次第でやりたいことができる時代だ。「多くの人と触れ合う中で、周りから価値が与えられる生活に加え、自分たちで価値を創造する生き方もあるということを知り、将来の生き方の選択幅を広げて欲しい」と山川教頭。

卒業後に志摩を出たとしても、地元の魅力に気づいて志摩に戻ったり、志摩以外で暮らすことになっても旅行先として志摩を選んだり、地域への貢献の仕方はさまざまである。志摩高校は「地域を愛し、地域に貢献する」、そんな生徒の育成を学校の目指す姿に掲げている。身近にある魅力や人々のつながりを生かして、自らを磨き高め、志摩出身だということを誇りに思う大人になって欲しいと、志摩学の可能性を掘り起こしている。



1 2 1学期に行う講演会。市役所担当課や市内で活動する人の話で、志摩の現状や課題などを学ぶ　3 ～ 8 2学期に現場へ出るフィールドワーク。職場体験では魚市場や製造業、販売業、観光業、また医療や福祉、保育など、ジャンルさまざまに訪問　9 10 3学期の発表会。それぞれが工夫を凝らしてプレゼン力を発揮し、社会で生きる力を身に付ける

P5 に
志摩高等学校の生徒が
大王町を取材した様子&
原稿作成したページが
掲載されています

DATA

三重県立志摩高等学校

志摩市磯部町恵利原 1308
TEL 0599-55-1166
http://www.mie-c.ed.jp/hsima/

文／中村元美　写真提供／三重県立志摩高等学校　デザイン／長濱由衣子